

鈍感な会長と悩める乙女の役員達と召喚獣

政行

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学力低下が嘆かれる現代にて、ここ文月学園は私立の進学校でありながら世界で初となる科学とオカルトの偶然によつて誕生した試験召喚戦争―通称：試験戦争システムを導入している進学校兼試験校である。

そんな文月学園に新たに設立される文月学園生徒会。ここは生徒同士のトラブルなどを一手に引き受ける機関であり、試験戦争などの行事を滞りなく実行する目的とされた自治組織だ。

そこに入ることになった学園始まって以来の秀才だけど、鈍感な吉井明久は会長を務める事となった。これはそんな鈍感な会長とその会長に好意を抱く乙女な少女達の学園ラブコメである。

目次

試験召喚戦争編

メインキャラ設定	1
文月学園と在籍生徒の家族の設定	7
1話	10
2話	13
第3話	21
第4話	28
第5話	32
第6話	39
第7話	43
第8話	51
第9話	55
第10話	59

試験召喚戦争編

メインキャラ設定

生徒会メンバー設定

原作メンバー

吉井明久

2年Fクラスに所属する生徒会会長（後にAクラスに移籍し、Aクラス代表）

身長：174 cm 体重：66 kg

この物語の主人公

文月学園始まって以来の天才でファンクラブがある。（本人に自覚は無い。）

性格は誰にでも平等に接するが、自分の仲間や生徒会メンバーを馬鹿にしたりする相手には容赦無い。学園長の不手際によって本来の点数より10分の1に抑えられてしまい、本来ならAクラス代表の所をFクラスに在籍することになる。学園に入ってからすぐの頃、自ら率先して特別処遇者（物理干渉のみあり）に志願する。だが、あまり知られていないため観察処分者だと思われる。生徒会では書類の作成と印鑑、試験戦争時の事後処理など多岐

成績

本来の点数は全てにおいて800点を軽く超えている。日本史世界史は1000点越えだが、システム調整の間は10分の1の点数しかない。

得意科目：日本史、世界史

苦手科目：無し

召喚獣

伊予札黒糸威胴丸具足（家康が後年愛用した鎧兜）に双剣、双銃
ただし、これは仮の姿本来の姿は後々に明かされる。

腕輪 風神剣

風神の守護を賜り、突進や斬撃に風の衝撃波が付く。

木下優子

2年Aクラス所属の生徒会副会長

身長：159 cm 体重：49 kg スリーサイズ 74/5780

2学年の模範生として生徒会に所属することになった。主な仕事は明久の仕事のフォローとサポート

明久のことは最初は観察処分者だと思っていたが、自分から教師の事を手伝うために特別処遇者に立候補した彼に感心する。好意を寄せるようになったのは自分の趣味が知られても引かずにはそれは人それぞれ個性だと言ってくれた彼にときめいてしまったから

成績 模範生らしく全教科400点近い点数を取る。

得意科目：現代文

苦手科目：古典

召喚獣 西洋鎧に鳥爪雲雀という矢手甲を装備している

腕輪 百万一心

後方から矢が雨霰と降ってくる。

リトバスメンバー

来ヶ谷唯湖

身長：170 cm 体重：55 kg スリーサイズ 90/60/89

2年Aクラス所属の生徒会役員書記

明久とは高校で初めて出会う。よく明久を弄って遊んでいるが本心では彼の頭の良さに感心しており、彼の勧めで生徒会に所属する。

普段は同性の女子にセクハラ発言などをして弄ったりするなど遊んでいるが、会議では真面目にノートを取る。なお、FFF団に関しては会長である明久を守る名目で他のことで煽ったりして回避させる。クラスが分かれて、明久のことが気になっていて、その心はとも乙女である。(試召戦争後明久と葉留佳をAクラスに移籍させる)

成績

全体的に高くAクラス内でもトップクラス

得意科目：数学

苦手科目：無し

召喚獣

黒色の鎧を着て日本刀とマシンガンを装備している。

腕輪 雷神剣

剣に雷を纏わせ攻撃力と移動速度をを底上げする。

三枝葉留佳

2年Fクラスに所属する生徒会役員会計

身長：163 cm 体重：49 kg スリーサイズ 81／59／82

明久の小学校の頃からの付き合い。その頃から明久に惚れていてずっと一途に想って来た。(当の本人は気付きもしないが)

生徒会に入った経緯は明久と一緒に居れるため所属している。

だが、生徒会でありながら、風紀委員に偶に悪戯をして追い掛ける。

成績 本来ならBクラスには悪くてDクラス良くてCクラスに入れるぐらいの学力だったが試験の日は寝坊してサボッタージユを決め込んだ。その日明久の家に勝手に上がりこんで明久に叱られた。後に真面目に勉強してAクラスに入れるぐらいの成績に上がる。

召喚獣 オレンジの外套に身を包み、伏鬼兼光という名前の日本

刀、ヨーヨーの様に糸に括り付けたビー玉

腕輪 破邪のビー玉

刀に宿る靈気をビー玉に宿し巨大化させ相手に叩き付ける。

神北小毬

2年Aクラス所属の生徒会庶務

身長：159 cm 体重：45 kg スリーサイズ 83／57／84

明久の中学校のクラスメイトで不良に絡まれているところを助けてもらい、その後仲良くなる。仲良くしていくうちに他の女の子と一緒に明久が居たりすると胸が痛むのを感じ、自分がいつの間にか恋をしていたことに気付く。

その後、明久を追って文月学園へ入学し、生徒会に入る。生徒会では庶務を担当するがよくドジを踏んだりする。

成績 何でもそつなくこなし、学年でも高順位

得意科目：英語

苦手科目：古典

召喚獣 緋色のバトルスーツを着て飛燕剣を持っている。

腕輪 幻影

幻を作り相手を惑わして本体と共に攻撃する。

委員会連盟主要メンバー

風紀委員会

学園の風紀を正す、もしくは治安維持を促すために起こされた委員会組織の筆頭格

委員長は三枝（旧姓：二木）佳奈多

風紀委員会は2年生と1年生で構成されており、活動時に腕に赤い腕章を付ける。

主な活動内容は

1. 生徒の校舎内への不用物持ち込み検査（葉留佳はこれをあの手、この手で潜り抜けている。）
2. 生徒の登校時生徒会とともに生徒の服装指導（地毛ならばどのような色でも可、ただし、その際は本人の許可なく髪の色素を調べるために科学部「説明は後述」の装置を使い調べる）
3. 校内の見回りをして下校していない生徒を下校させる、または寮に帰す。
4. 学校内でのイタズラや悪事を働いた生徒を捕縛し、委員会室にて反省文を書かせる。

二木佳奈多

2年Aクラス所属の風紀委員会委員長で明久不在の間の代理代表

身長：163 cm 体重：47 kg スリーサイズ 80 / 57 / 82

Fクラスに居る三枝葉留佳は異父姉妹

明久の次に高成績で学園に入学し、同じ時期に風紀委員会に自ら志願して入った。明久の真っ直ぐな心や自分と同じ様に率先して特別処遇者に志願したり、努力を怠らない明久が気になりだしいつしか好意を寄せる様になる。（本人は否定する）女子剣道部との両立の為に明久に校内の巡回などを頼んでいる。後に三枝姓を名乗り、三枝佳奈多となる。

成績 明久に引けを取らず高く700点台を出して居る。努力を

続けており、いつかは明久を超えたいと思っている。

得意科目：全般

苦手科目：特に無し

召喚獣 女性用の陣羽織と鎧に備前近景

腕輪 神速居合斬り

目にも留まらぬ速さで相手に致命傷を与える。しかし、明久には見切られる。

寮会

文月学園に通う生徒のうち実家より通うのに時間のかかるものが生活する寮の運営をしている。本来は委員会の管轄ではないが、余り生徒数に教師も対応しきれないので委員会所属となった。寮長の後任は指名式で決まる。主な活動は

1. 生徒の寮で生活向上
2. 寮でのいざこざの判断
3. クレーム処理
4. 寮内の日用品の買い出し

女子寮長

天野葵

文月学園に通う高校3年生でAクラス所属の女子生徒。前寮長より後任に指名され寮長となった。寮会の仕事を真面目にやる時もあるが、よくにゅふふと言う独特の含み笑いをする。

男子寮長である棗恭介に想いを寄せている。

男子寮長

棗恭介

文月学園に通う高校3年生で天野と同じくAクラス所属している男子生徒。前男子寮長は本来なら明久に任せたかったが、本人が拒否したため恭介が選ばれた。

常に何かしら騒動を起こす雄二達を楽しい奴らとして気に入っている。

保健委員会

保健室に保健医が居ない場合などに怪我をした生徒の手当てなど

をしている。

文月学園と在籍生徒の家族の設定

・文月学園

東京都文月郡如月市奥多摩町にある私立学校法人で全寮制の中高一貫の進学校である。奥多摩町のほぼ中央部に位置し都内から中高両方を合わせると総勢10,000人に達し、大学並みの在籍生徒数を誇る。

文月学園に入学すると家から通うか、男女別の寮に入るかを書類で聞かれ、どちらか選び郵送することで決定し、1人部屋か、相部屋を割り振られる。学園長は藤堂カオル、校長は中等部が竹原が教頭と兼任して就任、高等部を福原慎が就任している。藤堂カオルは基本経営を任せて研究ばかりしているので基本的に竹原と福原の2人が経営担当である。

校舎は日当たりが良くし尚且つ風通りが良くなるように広い中庭を持ち、さらに清水寺の清水の舞台などに用いられる技法・懸造りを用いた屋外テラスを旧校舎と新校舎に設置されてそこはカフェテラスが経営されている。食堂はそれぞれ2つずつ設置されている。

・文月学園高等部

原作及び、本作の舞台となる高等学校で、現代で嘆かれる学力低下の対策のために他の学校にない試験召喚システムを導入している。進学校故に振り分け試験の試験結果は個人個人に渡していく。進学校であるのと同時に実験を目的とした試験校でもある。

設備の大部分は学園のスポンサーからの提供品などが多い。また、スポンサーからの資金援助などにより学費はとても安く、プライスな値段に設定されている。

文月学園高等部は基本、生徒を大量に取られたことから近隣の高校からは目の敵にされており、また試験校のため経営が世論に左右されやすく、イメージの低下を避けるため不祥事は大っぴらにできないという問題点がある。そのため警察沙汰になるようなことも揉み消すことが多い。旧校舎、新校舎と学生寮は渡り廊下で繋がれ、さらには裏庭と屋内の運動部用の運動場、グラウンドに水泳部用の屋内プールと

屋外プールの2つも設備としてある。

・文月学園学生寮

スポンサー出資の元、床下暖房と冷暖房が完備され、男子寮、女子寮共に共通の場所である談話室、それぞれの部屋に備え付けられているバスタブとシャワールームに大浴場がある。

・吉井家

一男一女 母親が基本的な権限を持っているが絶対的な権力は父親が有している。東京でも有名なマンションとホテルなどを経営している母親と内閣総理大臣をしている父によって家は港区赤坂に邸宅を構えているが、明久は家から通わずに学生寮を利用してゐる。

文月学園のスポンサー連盟盟主で三枝家とは古くからの付き合い。

吉井勇人

明久の父、現内閣総理大臣。慶○義○大学 法学部 政治学科卒業後、渡米。アメリカ大統領元秘書を務めた後に日本に帰国、東京都知事を経て後、前内閣の文部科学大臣という職を経て内閣の任期満了に伴い、総裁に就任し、選挙で選ばれ首相に任命される。

吉井春海

明久の母、ホテル、マンションなどの土地を所有する吉井土地証券の社長。○本大学 経済学部首席卒 赤坂にある吉井邸の土地は彼女の私有地。夫婦仲は良く、夫と結婚した直後に自分の私有地を提供するなど器が大きい。

・三枝家、二木家

2女 三枝家は東京都世田谷区に屋敷を構える古くからの名家で二木家はその当主の弟が同じく世田谷区に屋敷を立てていてその家同士を繋げているため、家の坪は200坪に及ぶ大邸宅になっている。

三枝家の当主は三枝晶、二木家は二木冬馬でお互いに同じ女性と結婚し生まれたのが葉留佳と佳奈多で後に二木家も三枝姓を名乗る。

三枝晶

葉留佳と佳奈多の父親の1人。基本はパートアルバイト。家での地位は低い。けれど頼れる時は頼れる父親。

二木（三枝）冬馬

葉留佳と佳奈多のもう1人の父親。世田谷区に多数の土地を持つ土地の主人基本は彼が家を切り盛りしている。

・来ヶ谷家

一女 東京都武蔵野市吉祥寺町に一軒家を建てている。来ヶ谷家はかつてはヨーロッパに居たことがあり、その関係上、家族にはミドルネームがある。

来ヶ谷家唯香

唯湖の母 ○大 医学部医学科卒 夫とは外国留学中に出会い、恋に落ち後に結婚。外国で唯湖を産み、その後日本に帰国する。

・神北家

一男一女（長男は病死） 実家は神奈川県湘南郡小田原市にある。兄の病気のため小毬は神奈川から親戚の家に転がり込んでいたが、その後高校に入学を期に寮に入った。実家には今尚両親が小毬の部屋を綺麗にしながら帰るのを待っている。

神北拓也

小毬の兄、故人。幼い頃から体が弱く、入院と退院を繰り返していた。けれども中学に上がって病状が悪化、そのまま帰らぬ人となる。それが小毬の心に影を落とすも明久によって救われた。

・木下家

一男一女 千葉県香取郡香取市小見川町に一軒家を建てている。2人は遠い場所を選んだ理由は自立しようというのと自分の夢を叶えたい秀吉とコミケに行くのが楽という理由の優子により選ばれた。家のデザインは至って普通。

1話

春……それは出会いの季節であり、別れの季節。そして新たなスタートを切る季節でもある。

出会い、新しい学年で去年は違うクラスの生徒の子と一緒にいたり、転校生が転入してくる事だってある。

別れ、親しい友の転校、良くしてくれた部活の先輩の卒業

新たなスタートは進学したり、就職などの慣れた環境から巣立ち未知の環境に向かって歩みを進める。

それら全てが詰まった季節である。

そんな季節の象徴たる桜を眺めながら制服に身を包んだ男子生徒が通学路を歩いていた。

明久 side

皆は春といえど何を思い浮かべるだろうか？ 出会い？ 別れ？

きつと多くの人はそう考えるんじゃないかな？

でも、僕はそうは思はない。

僕にとって春は一年が過ぎ去ったという認識を与える。

ジジ臭いと思うかもしれない、けれどそれが一番僕が最初に考える事なんだ。

1年、また1年と過ぎ、気付けば僕も就職してあくせく働くのだろう、そういう風に捉えてしまう。

だって一年という月日の中でどれだけ社会に出ても恥ずかしくないようになるには1年は短い気がするなあ

1年の始まりを祝うのも日本人なので祝いたくないわけではないのだけれどね。

そんな様々の思いを胸に閉まって僕は文月学園の校門を目指す。

「ん？吉井早いな、お前が一番だぞ」

校門に着くとスーツを着た黒い肌の男性が傍に箱を置いた机と一緒に立っていた。

彼は西村宗一、この文月学園の補習担当で風紀を乱したり、補習を脱走しようとした生徒には鉄拳制裁も辞さないという。

さらに、彼は補習担当であるが故に全教科の点数が700点台を叩き出すなど知勇共に優れている。

趣味はトライアスロンらしく、その趣味故に鉄人という渾名と云うか、通称を素行の悪い生徒達から呼ばれ、親しまれている(?)

彼は僕の事を認識すると机に置いてあった箱に手を突っ込み僕の名前の書かれた茶色の封筒を差し出した。

「竹原教頭先生から呼ばれていて、早めに来ておきました」

僕はその封筒を受け取って質問に答える。

「そうか、なら早く行くといい」

「分かりましたそれでは「ああ、それと」何でしょうか？」

僕は会釈するとその場を去ろうとしたが先生に呼び止められる。

「振り分け試験の結果は先生に会うまで開けないように、と学園長から伝言だ」

何で先生の前限定でしか開けてはいけないのだろうか？

考えようにも判断する材料が少ない今の状態では判断しがたいので諦める。

「分かりました。それでは失礼します」

学園の校舎に入り、廊下を歩く。西村先生の言う通り誰も居なかった。

部活動も今は活動をしていない。

教頭先生はよく研究などに没頭する学園長に変わって経営を担当
していてよく文句を言い、学園長室に入ることが多い。僕自身も召
喚獣の試運転やモニタリングの手伝いに巻き込まれているから一緒
に抗議する。

コンコン

「教頭先生、2年の吉井明久です。只今到着しました」

『ああ、入って良いぞ』

「失礼します」

入る前にノックし誰なのかを言うと言ったので入室する。

そこには学園長と教頭先生がデスクを挟んで対峙していた。

「教頭先生、僕が呼ばれた理由は一体何なのでしょう？」

「ああ、実はな……………」

僕は教頭先生に質問すると前置きをして訳を話した。

―教師説明中―

「つまり、僕の点数が高すぎる為にシステムのアップグレードが必要
となるからそれまで僕の点数は本来の10分の1に抑えられるから
Fクラスで過ごすことになる」と

「ああ、恨むならこのポンコツババアに言ってくれ俺はお前みたいな
の為にアップグレードしようと言っていたのに面倒だの一点張り
でしなかったんだからな」

何でふざけた理由だ。

「悪かったとは思ってるよ。だから今急ピッチでアップグレードして
るんじゃないかい」

「大体アンタ何時も……………」

「それより、もう一つあるんだよ。吉井、アンタに生徒会会長を務めて
貰う」

「はあ……………？」

2話

明久side

「ここが生徒会室か。豪勢だなあ」

その後、学園長に説明を受け僕を含めて5名で生徒会として運営するのだという。顔あわせは放課後なので今の間に場所を把握しなければならぬ。そう思った僕は部屋にやって来た。

その件の部屋はAクラスをも凌駕する程の設備が整っていた。

キッチンコンロなどを常備した台所に、訪問してきた生徒に対応する応接室、会議を開いた際に使用する会議室、普段の書類を整理する事務室の4つにわけられている。

「おや、明久君じゃないか」

部屋の間取りを確認していたら背後から声を掛けられた。

振り返るとそこには黒髪のアートヘアの胸の大きい女子生徒が居た。

「来ヶ谷さん？なんで」

「何、君と同じだよ。まあ、入る気はさらさらないがね」

彼女は来ヶ谷唯湖さん。この学校で僕が仲良くしている異性の友達だ。面白い事が好きで、よく僕の事をからかってくる。勉強はとて出来ないで良いと言われているため出て居ない。僕と佳奈多さんも言われているが僕らは出るだけ出ている。

「ここで会ったのも何かの縁だ。お姉さんの話を聞かせてやろう少年」

「良いよ別に」

「ブチ殺すぞへタレ小僧」

来ヶ谷さんは僕に話しに付き合えと暗に言って来たのを断ったら凄まじい殺気を放ってドスの利いた声を発する。理不尽だなあ……

明久side end

来ヶ谷 side

あれは、春のある日だ。寮から実家に帰ってゆったりとしていたら電話が掛かってきたんだよ。

「もしもし、来ヶ谷ですが？」

『来ヶ谷さんのご自宅ですか？私、文月学園教頭の竹原と言いますがどうかしたのか竹原教頭』来ヶ谷か。実はお前に生徒会の一員になつて……』断る「何故だ？」

電話の相手は教頭の竹原で私に生徒会に入れと言つてきた。まあ普通に断るがね。

「そんなことをする意義が無い。そもそも私は実力で難関大を受験する気なのだよ」

そう言つて私は電話を切つたな。

「はい!??教頭先生の電話断つた上に勝手に切つたの!??」

私が回想しながら話すとの確なツツコミをしてくれる。やはり明久君はからかい甲斐があるな。

「そういえば君はどのクラスに入ることになつたんだね？まあAクラスだろうがね」

「あはは、色々と諸事情があつてね。今年は葉留佳さんとFクラスに所属する事になつたよ」

私は少年のクラスがどこか聞いていなかったの聞いてみると笑いながら話した。そう言つてすぐに理由を言つてくれた。

なるほど、あの妖怪ババアか。まあそれならば仕方あるまい、私もアレと付き合うのは御免被るからな。

「そうか、では今年佳奈多君とコマリマックスを弄ることにしよう」
「誰も弄らないっていう選択肢は、無いんだね」

明久君が諦めたようにため息をつく。

「はっはっはっは、よく分かってるじゃないか。それにしてもその口調だと少年もお姉さんに構ってもらいたいのかね？ならばムヒヨツス来ケ谷ちゃん最高ツスとでも言えば構ってやるぞ」

「いや、やらないし、要らないよ！それにそんなの僕のキャラじゃないからね！！？」

うむ、ツツコミのキレも上々だな。それにしても葉留佳君は明久君の部屋に勝手に上がりこんでいたのか。

「おいたが過ぎたな葉留佳君は、お姉さんを差し置いて勝手に明久君の部屋に上がりこむとは、断罪せねばなるまい」

「程々にね。彼女、僕に説教されて、佳奈多さんにも折檻されたから」
ふむ、その辺はきっちりしているなニ木女史。ツンデレであるという事を自覚しているのだろうか？お姉さんはハアハアしそうだよ。

「それじゃあ来ケ谷さん入るなら放課後にね」

「ああ、また放課後だ。明久君」

そう言って生徒会室を出て行く明久君を見送ると何だか急に心がざわめいた。

「悲しい、か。こういうものを言うのだな。全くお姉さんと同じクラスにならず葉留佳君と同じクラスとは何事か少年」

私はそんな言葉を残し生徒会室を出て行った。

来ケ谷 s i d e e n d

葉留佳 s i d e

私は教頭先生に呼ばれ学校に行くと、よく問題を起こすので、そのペナルティーとして生徒会で業務を行うように命じれてしまったあ！

ううゝせつかくはるちんの明久君との夢の学園生活計画が〜！

恨みますよ教頭先生、卒業した暁には教頭室にロケット花火放り込んでやりましょうかね。

しかも、振り分け試験の日は気が乗らないからサボって明久君の部屋で遊んでたら明久君帰ってきちゃってその場で説教、さらに追い討

ちをかけるようにお姉ちゃんにその事がバレて折檻されてしまいましたヨ。

姉御にもバレてるだろうなく、何されるか分かりませんよホント。ハア〜それに明久君はきつと姉御やお姉ちゃんにコマりん達と仲良くAクラスで話してるのかな？

そんな事を思いながら歩いていたら見慣れた背中を見つけたのですヨ。

(むむっあれは明久君の背中ですね！腹いせに後ろから抱き付いてやりますよ)

そう思った私はそーつと近づくと明久君に抱きつき両眼を塞ぐ。

「あはは、私はだ〜れだ？」

「葉留佳さん」

「やはは、大〜正〜解！」

聞いたらちゃんと答えてくれる。昔、おじさん達に相手にして貰えず退屈だった。その時の気分を変えてくれたのが明久君なのですよ。イヤ〜はるちゃんにとっては本当に大事な人。たとえば、それがお姉ちゃんや姉御、小毬ちゃん和喧嘩する原因になったって私は良い。明久君を、私を1人にしないでくれる人を手に入れるなら皆とだって戦うもん。

はるちゃんはさ、寂しンボだから1人は嫌だから、友達が出来なくて辛かった日に光を、手を差し伸べてくれた明久君は渡さない。

「何してるの？」

「私は誰でしょうゲーム？」

「脈絡ないね」

「ありがとう！」

「褒めてないから!?!？」

あはは、この時間が幸せ。

「そーいや明久君なんでここに居るの？Aクラスは新校舎ですよ」

「諸事情でFクラスにならざるを得ないんだよ」

そう言っつて私に理由を説明してくれる明久君。訳を聞いてまた同じクラスなのが無性に嬉しくなった。だってまた明久君と一緒になん

だよ？クラスはどうか分からないけど、はるちゃんはさそれだけでも大満足なのですよ♪

「そっかくならまた一緒のクラスだね」

「最早腐れ縁みたいに思えるほどにね」

確かに小学校低学年の頃からずっと同じクラスで中学時代は明久君の隣をぐるっと一周したほどですネ。

「それじゃあ教室にレッツラゴー！」

「Let's go. ね」

細かい事は気にしちやだめっすよ。

そうして私と明久君の手を握ってFクラスの教室へと向かった。

葉留佳 side end

佳奈多 side

遅いわね。吉井ったらどうしたのかしら？

「あっかなちゃん、おはよ〜」

そう言っつて笑顔で挨拶してきたのは神北さん。

「おはよう神北さん。今日もセーターなのね」

「おはよう小毬君それに佳奈多君」

「あっゆいちゃんおはよ〜」

「ゆいちゃんは止めてくれ」

このやり取りも見慣れたわね、そう思いながら見守る。

来ヶ谷さんは天然が苦手なのだという。

「そういえば明久君だが」

神北さんとのやり取りを終えた来ヶ谷さんが思い出した様に呟く。

「明久君は諸事情によりFクラスに在籍することになったらしい」
えっ？

「ほ、本当にゆいちゃん!?!?」

「小毬君、声を落とした方が良い」

確かにそのままの声は非常に不味いわ。

「なら、Fクラスに試召戦争を申し込んで葉留佳君と一緒に移籍してもらおうのはいかが?」

なるほど、そうすれば彼も葉留佳もこっちに来るのね。

ち、違うわよ!?!?メインは葉留佳であって吉井はついでなのよ!そこでニヤニヤしたあなた風紀委員会の会議室で反省文を書いてもらいます。

「そつかく明久君をこのクラスに在籍するようにすれば良いもんね。ゆいちゃんすごくいい」

神北さんも同意したし、決まりね。

「うむ、ではこのことは内密にして大義名分が出来たら仕掛けるとしてよう」

こうして私達は吉井と葉留佳をクラスに引き込むために行動を起こした。

明久side

「これが教室? 廃屋だよね」

「そ、そうですね……」

僕の言葉に葉留佳さんも啞然としながら同意する。

「とりあえず入りましょうか? おっはく!!?」

元気良く入っていく葉留佳さんそしてー

「早く座れ、この蛆虫野郎つな!?!?三枝!?!?」

ー罵倒される。

「グスツ明久君く私蛆虫野郎って言われたよく!!?」

『死ねえええ!!?』

「なっ!!? お前ら今日会ったばかりだろ!!?」

「喧しい! 女子を泣かす奴は処刑じゃー!!?」

「ヒヤツハー!!?」

「殺っちゃうよ!」

ぞろぞろとFクラスに在籍する生徒たちが葉留佳さんを罵倒した生徒に飛び掛かり、ボコし出した。

「よしよしっ、葉留佳さんは蛆虫じゃないよ。女の子を泣かす奴はただの屑だよ」

「えへへ♪」

「酷い目にあつたぜ」

数分後ボロ雑巾になった赤い髪の毛の野性味溢れる男子生徒がこちらに来る。

「自業自得だよ、雄二」

彼は坂本雄二。僕の高校に入ってから出来た同性の友達。昔は神童と呼ばれるほど賢かったんだけどある日を境に悪鬼羅刹と呼ばれる不良に中学からなっている。けれど神童の頃の頭の回転の速さは抜けていない。そして良く面倒事を他人僕に擦りつける。

「それにしても雄二が代表なんだね」

「バカ、明久の割によく分かったな」

「コイツ腹立つ。点数が本来の点数に戻った暁には絶対にボコス。」

「それより席は?」

「自由に座って良いぞ」

席も決まっていなくて……

教頭先生も流石に鼻屑は出来ないのか僕の設備もFクラスの生徒とと同じ卓袱台に座布団に畳だ。

どこの昭和の食卓？

「明久君の隣頂き！」

そう言っ僕が座った隣にある鞆を放った後そこに座る。

「テメエ三枝！俺がとっっていた場所取るか普通!?？」

「へへ〜んだ！座ってないのが悪いんですよ〜だ!!？」

そう言っ言い合いをする雄二と葉留佳さん。子供みたいだな。

そんなことを思いながらこれからのことを不安に思う僕だった。

明久 s i d e e n d

第3話

葉留佳 side

坂本君とひとしきり抗議し合った私たちは、明久君の仲介によって事が収まり、はるちゃんは明久君の隣に坂本君はその前に座る事になった。

「ねえねえ、明久君、明久君」

「ん、何？」

「今日の放課後は顔合わせだけなんだよね？」

隣に明久君が座るとすぐ様に話し掛けて今日の予定を確認する。

「うん、そうだよ」

「お前ら何の話してんだ？」

「バイトの話だよ。僕たちたまたま、同じバイト先でバイトしてるからね」

そのことを明久君が肯定していたら坂本君が振り返って話しかけてきたので咄嗟に明久君は嘘を言う。

「そうか。そういやお前って塩と水だけで生活してんだろ？」

はい？それは聞き捨てならないですよ。さっそく明日お弁当を……

「何言ってるの？そんな生活送ってるわけないじゃん。それ誰から聞いたの？それとも噂？」

明久君が呆れながら否定して問い詰める。

「いや、噂だが」

なんだあゝつまらないですな。それにしても誰が流してるんですかね、その噂？根源を見つけてとつちめないといけないのですヨ。

「それでなんのためにバイトすんだ？」

坂本君もしつこいですね。そんなんじやモテませんよ。まあ、ゴリラですし構わないっちゃ構いませんし、どうでもいいですしね。

「三枝、何か失礼なこと考えてないか？」

うっ、鋭い。

「何も考えてなんかないのですヨ」

内心驚きながらも普通に返すと坂本君もそれ以上は追求してこなかった。どうやら興味がなくなつたみたい。

「皆さん席に着いてください。H・R・を始めますので」

そう言つて教室の前の扉からヨレヨレのスーツを着たタレ目の初老の男性教師が入ってくる。

確か、中等部の経営者兼高等部校長の福原さんだっけ？この担任なんだ。

「えー私がFクラスの担任の福原慎です」

福原先生は黒板に名前を書き終えると振り返り、教卓に手をつく。

「皆さんには卓袱台と座布団が支給されていますが何か問題や不備はありませんか？」

（はるちゃんは昭和の食卓で勉強してるって知ったらお姉ちゃんはなんて言うだろう）

（間違いなく学園長に抗議しに行くだろうね）

確かにそれは考えられそうですね。あの妹想いで優しいお姉ちゃんのことだから自分の待遇なんか知つたこつちやないと言つて家に働きかけて設備を変えさせそうですね。

そんなことを思いながら前を見ていると先生は私達を見回して誰もいないのを確認する。

「では自己紹介して行つてください。そうですね、窓際からお願ひします」

その言葉によつて1人1人自分の名前と趣味を言つていく。

そして次の生徒が立ち上がった。その男子生徒は見た目が女の子だが、男子の服を着ている。

「木下秀吉じゃ。千葉県の方から来ておつてな、家が遠いから基本は学生寮通いじゃ。演劇部所属しておる」

あつ、秀吉君だ。知り合い多いのはいいことですね。

彼は木下秀吉君。私と同じくよく問題を起こす人物の1人としてリストに入っている。演劇にはすごく力を入れてるらしく、それで勉強が疎からしい。

はるちゃん？はるちゃんは忙しいのですよ。色々と、ね。えっと、お姉

ちやんからかったり、風紀委員にイタズラしたり、風紀委員に追い掛けられたり、ホラ予定がいっぱいなのですよ。

「後、よく間違えられるから言っておくが、わしは男じゃ」

秀吉君の悩みはその容姿が双子の姉に瓜二つなので、よく性別を勘違いされるらしい。でもそのネタで弄ると面白んだよ、またこれが。

「バ、馬鹿なー!?!?」

「お、男だと!あの可憐さでか!?!?」

「俺の青春が1つ消えたー!」

秀吉君の自己紹介にクラスの中から絶望の声がひしめき出す。

「いや、待て。木下は男だとは言ったが、女だとは言っていない。つまり第三の性別秀吉なんじゃないか!?!?」

「お前天才か!?!?」

果てにはおかしなことを言い出すし、はるちん不安になってきました。真面目に受けた方が良かったですかね?

秀吉君も呆れて座り込む。

「……………土屋康太」

短っ!

この短い自己紹介をしたのが同じく問題児のレツテルを貼られている土屋康太君。

寡黙で小柄、忍者みたいな身のこなしで女の子を盗撮したりして、それを売っている。

「……………です。日本語は読めますが、書くのは苦手です。英語も得意じゃないです、ドイツで暮らしていたので、趣味は……………」

ん?はるちん以外にも女子いるじゃん。仲良くなー

「吉井明久をぶん殴ることです☆」

なれない!はるちんの、いやはるちん以下姉御にお姉ちゃん、それにコマリんの敵ですよ。この女子!

「ハローハロー、今年もよろしくね吉井」

そう言っ明久君に手を振る島田さん、そんな彼女に明久君も苦笑いを浮かべながら手を振る。

ありや次ははるちんですね。

「三枝葉留佳でつす、そこにいる明久君とは小学校の頃からの幼馴染なの。だから、もし酷いことしたら風紀委員の姉に言い付けるのでそのつもりでいてくださいね。あと、はるちんの居ない間に明久君に何かしたら三枝クオリチャーを使って酷い目にあわせっちゃいますぜ」

まあこのぐらいつしよ。

ふう、すつきりしたー。ゴリラの相手して少し気分悪かったのなんとかになりましたね。

はるちんがそういうことを考えてのほほんとしてると明久君に順番が回ってきましたよ。

よっはるちんは明久君のお嫁さんになるのも夢見ちゃってますよ。子供ほいかな？

「吉井明久です。趣味は料理、特技は相手の心情を制限して丸め込むことです。どうぞよろしく」

そう淡々と言ってさっさと座る。あんまり関わりたくないんだね。

その後も名前を言っていく作業が続く。

ガラッ！

「お、遅れて、すいません」

そう言っ胸に手を当てたピンク色の髪の子学生徒が息を切らして立っていた。

「ちようど良かったです。今自己紹介の最中なので姫路さんもこちらで自己紹介してください」

そう言って教卓の近くの床を指す。

「は、はい！姫路瑞希と言います。宜しく願います」

もともと小柄なのにあんなに縮こまって挨拶するとははるちんに弄って欲しいという意味表示か！

「小毬さんに似てるからって弄り過ぎちゃダメだよ」

そんなこと思ったら明久君が釘を刺してくる。

「嫌ですねえ〜そんなに苛めませんよ……多分」

「今、多分って言っただよ。気を付けなよ。悪戯でまた風紀委員にお世話になっても今度は庇えないんだからさ」

「はい」

「そこ、静かにして下さい」

明久君と話してたら先生に注意されちゃいましたよ。

「では最後にクラス代表の坂本君に自己紹介をお願いします」
「ういっす」

そう言われるとゴリラは前に出て教卓にまた立つ。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。坂本でも雄二でも好きに呼んでくれ」
「ならゴリラ!」

「赤い野生」

「明久、三枝 teme 等後で覚えてろよ?」

坂本君はそう言って睨んでくるけど私達は素知らぬ顔をする。

「話を戻すが、俺達 F クラスの設備はガタが来ていないとはいえ酷いものだと思うが、お前達はと思う?」

『こんな耐えられるかー!!?』

おー、坂本君の言葉に全員反応しましたよ。

(正直言々と自業自得だけどね)

(それ言っちゃ元も子もないですよ)

2人でコソコソと話す。

「Aクラスの設備はシステムデスクにリクライニングシート、個人ノートパソコンに個人冷蔵庫にはお菓子完備だ」

『ふさげんなー!!?』

全員ノッチャてますね。明久君は消極的だけど。

「そうだろう!??そこでだ、俺はAクラスに試召戦争を仕掛けようと思っ!」

その言葉にさつきまで騒がしかったFクラス生徒は一瞬で静まり返った。

「無理だ」

「勝てるわけがない」

「三枝さん付き合「はるちゃんはお断りですよ!!?」チクショー!!?」

「姫路さんさえいれば何も要らない!」

皆口々に否定する。中にははるちゃんに告白してきたけど玉砕したり、可笑しな人もいた。

「いいや、勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

そんな言葉を否定する坂本君の自信は何でしょうか？

「何故ならここにはAクラスに匹敵する実力者が揃っている！ソイツ等を紹介してやる」

そう言うとき教室を見回すと私の方を見る。

へっ？はるちんスカ？

「おい康太、いつまでも三枝の下着見てないで前に来い」

「へっ？キャー!!？康太君！はるちんスーパーウルトラダイナミックビー玉!!？」

はるちんはスカート康太君の近くを見ると変態がはるちんの下着を覗いていたので騒いだ後、ビー玉を投げつける。

「グハッ!!？」

それは顔面に直撃した。その一撃を受けた後前が出る。

「コイツかの有名な寡黙ムツツなる性識者リーニだ」

「!!？」

そう言われるとブンブンと首を振る。

「コイツがかの有名な寡黙ムツツなる性識者リーニだ」

「なっ奴がそうなのか!!？」

「見ろ！必死に畳の後を隠そうとしているぞ！」

「ああ、ムツツリーニの名に恥じない姿だ」

褒められますよ、よかったね。うん明久君何？褒めてない、いいじゃん別にさ〜

「姫路の実力は知っているだろ」

「わ、私ですか!!？」

そりゃ呼ばれるよね。Aクラス上位なんだから。

「が、頑張ります！」

「木下秀吉だっている」

「ワシか？」

「数学なら島田はBクラス並、三枝は理数系ではAクラス上位だ」

さらに秀吉君、島田さんにはるちんと続く。てかなんではるちんの成績知ってるんですか!!？

「無論、俺も全力を尽くす」

「坂本って昔神童って呼ばれてたんだろ？」

「マジか!?!? ってことはこのクラスにはAクラス並の生徒が4人もいるのか?。」

「勝てる、勝てるかもしれないぞこりや」

「どんどん上がっていく士気。もし、熱気に何らかの力があつたら教室が壊れてますな。」

「それに、吉井明久だっている!。」

シーン

明久君の名前を出すと一気に下がった。

「誰だ吉井って?。」

「そんなに凄いのか?。」

「いや、コイツは「特別処遇者だよ」何!?!?。」

あつやっぱり知らないんだ。

「よく間違われるけど、観察処分者は馬鹿の代名詞、特別処遇者はフィードバックの無い教師の手伝い人さ。召喚獣の扱いならこの中で誰よりも上手いよ。細かい事は家に埋まつてるかもしれない生徒手帳でも見えてくれるかな?。」

明久君の説明にその場はおし黙る。

「と、とにかく!これだけの戦力があるんだ。Aクラス打倒だつて夢じゃない!。」

「お前らこの境遇は不満だろ!。」

『当然だ!!?。』

「ならお前ら筆^{ペン}を取れ!!?俺たちに必要なのは卓袱台じゃないシステムデスクだ!!?。」

第4話

佳奈多 side

私達は葉留佳と吉井を引き入れることを計画した後、時間まで談笑することにした。

「それにしても改めて見るが、すごい設備だな」

来ヶ谷さんが辺りを見回しながらそう言う。

「そうだよね、努力の結晶だとしても、ここまでしたら皆やる気なくしちゃうよ」

神北さんもほんわかとした口調で来ヶ谷さんの言葉に同調する。

それは言えている。シャンドリアが吊るされていて、クラスの生徒の1人1人に個人でノートパソコンにシステムデスク、リクライニングシート等を与えている時点で優遇のしすぎだ。これでは逆効果と言ってもいいわ。

「そんなことないわ」

私たちが話し合っていると女子生徒が3人近づいて来た。

「私たちは努力を続けて、この設備を勝ち取ったの。言うならばこれはご褒美なの。それを自分の欲の為に奪おうとする人の気がしないわ」

そう言ってきたのは2年生の模範生徒木下優子さん、それに私たちの次に成績の良い霧島翔子さん、最後に去年の11月に転校してきた工藤愛子さんだ。

「随分な言い口ね。一応理由を聞いておこうかしら?」

「当然じゃない。私たちはずっと頑張ったけれど、Fクラスにいる人物はその努力をしなかった人の集まりね。観察処分者の彼みたいじゃないのだけど。観察処分者? その処分を受けた生徒がいるという報告は聞いていないのだけど。」

「聞いてもいいかね木下女史?」

「何かしら?」

「それは誰の事かね? 私の記憶では特別処遇者は居ても観察処分者は居なかったと思うのだが」

「誰って吉井明久よ」

来ヶ谷さんと木下さんの会話を聞いてやはり彼はつくづく不幸だ
と思っただわ。

善意でやっている事を観察処分者としか捉えてもらえないなんて
ね

「ゆうちゃん、それは違うよ」

「ゆうちゃんって誰かしら？それに違うってどういうことよ」

神北さんの渾名も時々どうかと思うわ。

「明久君は、自分から特別処遇者に立候補したんだよ」

そう。彼は誰もが嫌っていた風紀委員に自分から入った私と同じ
様に誰もが嫌がり、自ら立候補しなかった特別処遇者に立候補した。

けれど特別処遇者はほとんど認知している生徒が少なく彼女の様
に勘違いされている人が多い。

「悪いことしたなあ。アタシずっと観察処分者だとばかり思って馬鹿
にしていたわ」

「はっはっは、誰しも先入観や噂で判断してしまうものさ。人とは基
本そんなものだよ。その人物を知るには本当の意味で話さなければ
ね。何より彼は君と同じ学生寮通いだ、話すタイミングはいつでもあ
るよ」

こんな風に談笑していたら先生が入ってきた。

「皆さん席について下さい。H・R・を始めます」

その言葉に全員が指定された席に座る。

それを確認すると高橋先生は教卓に手を着く。

「皆さん進級おめでとうございませす。2年Aクラス担任の高橋洋子で
す。よろしくお願ひします」

この人物は学年主任を務めていて、風紀委員会の顧問でもある。

「まず設備の確認をします。皆さんにはシステムデスク、リクライニ
ングシート、個人パソコン等が支給されています。この中で何か不備
があれば申し出て下さい」

そんな人がいるのかしら？逆に何が必要なのか問いただしたいわ。
「教材資料費などもこちらが出しますので何かあれば私に言っして下さい

い」

太っ腹ね。まあ、相当の額を私と吉井の家が出してるから当然ね。
「ではクラス代表に挨拶してもらいましょう。代表の二木さん前に出てきて下さい」

「はい」

呼ばれた私は席を立ちキビキビとした動きで前に出る。

「二木佳奈多です。剣道部と風紀委員会に所属していますので、疑問に思った事や風紀委員について知りたい人は私に相談してくださいればお答えします。以上です」

そう言うとははさつきと席に着く。

「では自己紹介を、窓際の席の方からお願ひします」

私はこの中に何人吉井のファンの娘が居るのかを考えるためにより集中していなかった。

「では授業を……失礼します。はい高橋です、はい、分かりました」

先生が授業を始めようとすると携帯が鳴り、それに出る。

「皆さんFクラスがDクラスに試召戦争を仕掛けたそうです。なので今からは自習となります」

そう言うとき教室を出て行った。恐らく、いつ呼ばれてもいいようにするためね。

「随分早いな、恐らくこれは別の人物の指示だろうな」

「ふえ？何で」

「いいかね小毬君。明久君は恐らくこの試召戦争に乗り気ではないだろう。葉留佳君起こしたにしても、恐らくいきなりここを狙ったりするだろうな。だからだよ」

来ヶ谷さんの言い分も最もだ。吉井は基本この試召戦争というものを好まない。入学したのだから親がスポンサーとしてどうなのかを体感してほしいという願いからなのだから余計だ。次に葉留佳だけど、あの子はそもそも後先考えたりするのは苦手な上にお気楽だからこんな事はしないだろうし、何より代表の許可なく試召戦争を起こ

す事は余りにも可笑しい。まあ、葉留佳ならやりかねないのかもしれないけど、彼女は吉井の嫌がる事をしない子だ。その辺りだけは確信できる。つまり、これは第三者、代表の意思で起こされたという事だ。「そっか〜そうだね。じゃあ誰だろ？Fクラスの代表さんなんて私知らないよ〜」

「安心するといい、発案者は雄二少年だ」

坂本ね、確かに彼ならやりかねない。

「ねえねえ何のはなししてるのカナ？僕も混ぜてよ」

「アタシも良いかしら？」

そう言つて工藤さんと木下さんがまた集まる。霧島さん？最初からいたわよ。

「……………雄二の目的は恐らく……」

「ほう、それは何故かな？」

「……………雄二は多分学力だけが全てじゃないという事を証明しようとしてる」

はあ？学力だけが全てじゃない？何を言っているのよ、確かに学力だけが全てじゃないけれど学力も大事な世を渡るための武器なのよ？

「はっはっは、彼は面白いな。ならお手並み拝見と行こうじゃないか」
そう言つて来ヶ谷さんは笑顔で笑つた。

第5話

明久side

「まずは、俺たちの実力を知らしめる為にDクラスに試召戦争を仕掛けようと思う。そのための死者を、明久！お前に任す。無事大役を果たせ。開戦は今日の午後からだ」

教卓で雄二がクラスの生徒を煽った後、宣戦布告の使者として僕を指名してきた。それは暗に僕にボコられて来いと言っているようなものだ。

「別にいいけど、正当防衛ぐらいは良いよね？後、雄二に言いたい事があるから」

そう言つて立ち上がると行こうとすると葉留佳さんに袖を掴まれる。

「はるちんも行つていいですかネ？」

「ダメだ。明久なら誰もが観察処分者だと思つて侮るがお前は色々知られているからな」

確かに大抵の生徒は僕を観察処分者だと認識している。それを逆手にとつて行こうということか。

「まあ葉留佳さんは目立ちやすいしね。僕だけで行くよ」

そう口にした時雄二の口元がニヤツとしたことを僕は見逃さなかつた。

馬鹿な奴だね、敢えてノツテあげてるつてのに

「おう、行つて来い」

その言葉を最後に僕は教室を出て行つた。

明久side end

雄二side

「クッククック、馬鹿な奴め素直に行きやつた」

「やはりお主の狙いはそれじゃったか」

俺が忍笑いを隠しきれず、そう呟いていたら秀吉が近づいて呆れたように言ってきた。

「当たり前だろ秀吉。俺はアイツの幸せが大っ嫌いなんだ」

「でも坂本君はアホの子ですね」

「三枝、誰がアホの子だ。アホの子はお前だろうが」

「ムキー！はるちゃんはアホの子じゃないやい!!?」

『異端者には死の鉄槌を!!?』

俺が秀吉と話していると三枝がアホの子だと言って来たのでそれはお前だと言いつ返してまた口論になると、クラスの奴らが覆面に黒のマントを纏って俺をまた取り囲む。

「なっ!!? テメエ等なんのつもりだ！」

「騒ぐな。諸君ここはどこだ？」

『最期の審判を下す法廷だ!!?』

「男とは？」

『愛を捨て哀に生きる者!!?』

「よろしい………これよ2ーF異端審問会を始める」

そんな言葉とともに俺はコイツ等によって紐でぐるぐる巻きにされて縛られ、足も胡座状態で縛られる。

「横溝、被告の罪状を読み上げよ」

「はっ、罪人坂本雄二は我らの血の掟に背き複数の女子と接触を「御託はいい、簡潔に述べよ！」女子と話すなんて羨ましいであります！」

この中のトップらしい生徒は俺の前に立ち傍にいる男子に指示を出す。

横溝と呼ばれた男子は訳の分からん口述をした。

つか、血の掟ってなんだ!!?」

「それならお前等！明久は良いのか!!? アイツは三枝と仲良くしてたぞ！」

俺だけ不幸になってたまるか！明久も道連れにしてやる！

「よし、奴は帰って来てから処刑じゃー!!?」

ヨッシャツ!!? コイツ等馬鹿だから扱い易いな。

「はるちゃんは明久君に酷いことする人は大嫌いですよ」

「いや待て諸君。吉井と仲良くすれば我らの女子成分である三枝と仲良くなれる！ならば奴と対立する必要はない！」

クソー!!?三枝く!!?テメエ邪魔しやがって!

「被告人の判決は死刑!!?紐なしバンジージャンプの刑だ。即刻刑を執行せよ」

そう言うとかラスの窓を開けて俺をそっちに引きずって行く。

「ま、待てお前等!!?」

『モテる奴は死ねええええ!!?』

その叫びと共に俺は3階からロープで縛られた状態で放り投げられた。

坂本雄二はこうして生涯を閉じた。完(笑)

「勝手に殺すな!クソ作者!!?つか、笑うな!!?」

雄二side end

明久side

雄二が教室で暴行されているとも知らない僕は1人Dクラスへと足を向けていた。

「さて、行こうかな。失礼します」

そう言つて堂々と教室に入るとDクラスの生徒が僕に視線を向ける。

「えっと『キヤー!!?』な、何!!?」

どう切り出そうかと悩んでいたら女子たちが歓声を上げてこっちにどつと集まる。

な、何!!?本当に何なの?

「吉井君よ!私に会いに来てくれたの!!?」

「んなわけないでしょ!私に決まってるじゃない!あつ吉井君、これ受け取ってくれる?」

「えっ、あつ、うんありがと？」

「ズルい！私も！」

「わ、私だって!!？」

いつの間にか両手一杯に手作りのお菓子が渡されてしまい、困惑する。そして男子からは棘のある視線を送られる。

「え、えっと代表は居るかな？」

そう言っつて青い髪の男子生徒が僕の近くにやって来る。

「初めまして俺が代表の平賀源二だけど何か用かな？」

「あ、うん。……僕たちFクラスはDクラスに試召戦争を仕掛ける！」

『!??!』

僕の言葉に全員が驚いた表情になる。

「開戦は今日の午後1時からで良いかな？」

「別に構わないよ。仕掛けられた俺たちは拒否権がないからな」

なるほどDクラス代表は中々物分りが良くて助かるね。これからもこうだと良いなあ。

「じゃあ、僕はこれで」

そう言っつて踵を返し、教室を出ようとすると呼び止められた。

「待てよ」

「宣戦布告しておいてそのまま帰れると思うなよ」

「憂さ晴らしに付き合ってもらおうぜ」

やっぱりこうなったか。できるだけ傷つけないんだけどな。

「吉井君に酷いことする男子なんて大嫌いよ！」

『そうよ、そうよ!!?!』

でもそれは女子によつて起こることは無かった。

「失礼したね」

そう言っつて出て行くと教室内から騒めきが聞こえて来る。

「ただいま」

「おう、帰ったか、って何で無事なんだ!?!?」

やはり嵌める気だったみたいだ。

「別に……………」

「で、開戦は何時からだ?」

「午後1時だよ。それと雄二今から少し話がしたい」

そうやって僕は2人だけで話すために隣の空き教室に入る。

「で、話つてのは何だ? 2人だけで話すつて事は誰にも聞いて欲しく無い話なんだろう?」

流石は元神童頭の回転と読み込みは速い。

「まず、僕はこの戦争に興味も無いし参加もしない」

「な、何故だ? お前は宣戦布告しに行ったんだぞ? それは戦争に参加する意思があるつてことだろう?」

僕の言葉に雄二は焦りを感じたようだ。

「参加しない理由は興味が無いつていうのも一理あるけど、本音は反対だから、だよ」

冷たくそう言い切った。

「反対? なぜ反対する」

僕の言葉に顔を顰める。納得いかないという顔だ。

「そうだね。理由は興味が無いつて言うのが理由の1つ、そして何より本当の理由は」

彼らが上位の設備を使う資格が無いから」

僕の1番の理由を聞いて雄二は驚いた。どうしてか? それはこの短時間で何故そんな結果が導き出されたのかということに対する疑問が含まれていた。

「資格だど？アイツ等は確かにどうしようも無い奴らだがそんな資格が無いわけじゃ無いだろ」

やっぱり雄二は彼らの真の底までは見通せていないみたいだね。彼らはただ、自分の欲望を満たすことしか頭にない。そのためなら誰だつて蹴落とすし、誰だつて自分と同じ境遇に引きずり落とす。

「別の質問、雄二は何のために試召戦争を起こすの？」

「それか？それは世の中は学力だけじゃないことを証明するためだ」

「それだけ？」

「それが何だ？」

僕は雄二の言葉にため息を吐く。

「雄二はさ自分の言ってることが矛盾していることに気付いてるのかな？」

「何！？俺の言っていることが矛盾しているだと!!？」

雄二は声を荒げ僕の胸倉を掴む。

「君は勝つ為に何を使って勝とうと言った？」

「そりゃ、姫路やムツツリーニの保健体育を使っ、はっ!!？」

おっ、ようやく気付いたね。

「自分で学力だけが全てじゃないって言ってるのに学力を頼りにしてるよね？そこが矛盾点。後言える事は……………」

「まだ、何かあるのか……………」

雄二は相当打ちのめされたのか声に覇気が無い、勢いがなくなってしまうている。ずっと自分の考えを形にしたものなのに1人の人物によって根底から覆されたのだ。そのショックは大きいものだ。

「さっき言ってた資格だけど、姫路さんは確かにAクラスの設備を使う資格があるよ。本来なら、彼女はこんなクラスじゃなくてもっと上のAクラスで霧島さんと点数を競い合っている人物だからね。でも彼女だけだ。葉留佳さんはお世辞にもAクラスかと言ったらそうでも無いよ。でも彼女が伸びるなら資格がある。他にそういう人がいればそうかもしれないんだ」

僕は一旦言葉を切る。

「でも、Fクラスの大半は僕の読みが正しければ、人の功績を自分の物

のように言い、何も努力しないで楽をしようとする人達ばかりだ。そんな人達が必死に努力して手に入れた設備を奪われたら不公平だよね？だから僕は反対なんだ」

「言いたい事はそれだけ。答えが見つかったら言ってくれば良いよ」

そう言っつて僕は雄二を残して教室へと戻った。

明久 s i d e e n d

第6話

明久 side

旧校舎と新校舎の渡り廊下から喧騒が聞こえてくる。

どうやら戦争が始まったらしい。とはいえ、僕は参加しないという理由で今は新校舎に設置されている職員室へと向かっている。

コンコン

「失礼します、2年Fクラスの吉井明久です。入室してもよろしいでしょうか？」

「吉井か？入って良いぞ」

「失礼します」

僕は入る前にノックし扉を開け、その前にどのクラスの所属か告げると、職員室の扉の一番近くに座っていた田中先生が僕に気付き入室を許可してくれたので、入室する。

「今日はどうした？確か今はFクラスはDクラスと試召戦争中じゃなかったか？」

やはり疑問に思ったのか聞いてくる。

「僕は今回の試召戦争に参加する意思がないので、こうして他のクラスの自習課題を受け取りに来ました」

「いつもすまんな。観察処分者でもないのにわざわざ、そうだな。高橋先生」

「はい？」

僕が理由を説明するとバツの悪そうな顔をして謝ってくる。別に思い詰める必要はないんだけどね。そんなことを考えていると田中先生は近くで高速にパソコンのキーボードを打つ高橋先生に話しかける。

呼ばれた本人は手を止め、こちらを見る。

「吉井が特別処遇者として雑用をしに来たそうでした、自習課題の配布を手伝いたいそうなのですがもう配りましたか？」

「Eクラス、Cクラス、Bクラスの自習課題は先生が作って持って行きましたがAクラスがまだなのでそちらをお願いします」

顎に手を当てて思い出すように言う。
となると、この上か。

「今作り終えて印刷するところなので待っていてください」
「分かりました」

僕はそう言っつて職員室の中を見回しながら時間が経つのを待つ。

ガガガガ

印刷音と共に課題用のプリントが50人分印刷される。

「出来ましたよ、では吉井君召喚を承認するのでお願いしますね」

「はい、試験召喚」

その言葉と共に明久の目の前に幾何学的な術式が展開され、それは彼の手を離れすぐ近くで彼を一回り小さくし、獣の尻尾が生えたものが出現する。その格好は戦国大名を沸騰させる鎧兜に腰に2本の刀、そして二丁の拳銃を装備している。そして頭には文字と数字が表示されている。それは今展開されている科目と召喚者がテストで出した点数だ。その科目は英語 89点と本来の装備ではないにしろそれなりの装備だった。これこそがこの学園が誇る試験召喚システムを利用した召喚獣というものだ。その力は1点でゴリラ並みの力を発揮する。

さらにこれは補足説明だが、観察処分者はフィードバック付きで物理干渉能力がある。フィードバックとは、召喚獣が受けた疲労、傷などが召喚者に何割か与えられることを指す。そして明久は特別処遇者

物理干渉のみがあるため、召喚獣に重たい物を持たせて運ぶのだ。

「では、Aクラスまで行ってきます」

そう言っつて職員室を後にしようとした。

「いたぞ吉井だ！」

「あん時の恨みを晴らしてやるぜー」

4人の生徒が僕を囲むように立ちはだかる。

「ああ、君達宣戦布告の時殴り掛かろうとした」

「ああ、テメエのせいで1年間肩身の狭い思いしなきゃいけないじゃねえか！」

いや、僕悪くないし。君たちがそうしただけじゃん。

「君達、今吉井君はAクラスに自習課題を届けに「構いませんよ横田先生」良いのか？」

そんな時偶々、そこを通りかかった横田先生が注意をしようとするが制止する。

「彼らは僕の点数を舐めているみたいなので少し知ってもらいましょう。格下格上の実力」

そう言って召喚獣に持たせていたプリントを横田先生に持つてもらい武器を構える。

「承認！」

そう言って日本史のフィールドが出現する。

『試験サモシ召喚』

日本史

Dクラス鈴木一郎 102点

Dクラス笹島圭吾 101点

Dクラス中野健太 107点

Dクラス鈴木雄太 104点

4人の召喚獣は殆ど鎧を身に付けていないのと同じで、あつても頭だったり、胴の一部だったりする。さらに武器も刃物系だが細い物、短い物などイマイチ決定打に欠ける武器ばかりだ。

V. S.

Fクラス吉井明久 142点

『はあ?』

Dクラスの4人は僕の点数に驚き唾然とする。けれど、その隙を見逃すほど僕は優しくない。

まず、1人目に近づき双剣の一振りで相手を一太刀の元に首を刎ねる。そしてすり抜け様に後方にいた1人を神速と言っても本来よりは遅いけどで七等分に斬り裂く。

Dクラス中野健太 0点

Dクラス鈴木雄太 0点

「なっ!!?!一瞬で、2人もだと!」

「クソツ挟み込むぞ!」

「おうっ!!?!」

討たれたの見て片方が指示する。2人は反対側から仕掛けてくる。

「無駄だよ」

ト伝流秘剣一ノ太刀

彼らの攻撃を軽いステップで躲し、持っていた刀で相手の召喚獣2体を一太刀で真つ二つにする。

Dクラス鈴木一郎 0点

Dクラス笹島圭吾 0点

「戦死者は補習ー!!?!」

そう言つてダンボールから西村先生がいきなり出て来て4人を担ぎ上げる。

「待ってくれ鉄人!吉井の反則だ!」

「どういうことだ?」

西村先生が止まる。

「吉井はカンニングしたんだ!観察処分者なのにCクラス並みの点数だ!」

「はあく、吉井は観察処分者ではなく、特別処遇者だぞ………」

『えっ?』

本当に知られてないんだね。まあ僻みもしないけどさ。

「横田先生ありがとうございます。では、Aクラスに課題を届けに行きますね」

そう言つて僕はその場を後にした。

明久side end

第7話

小毬 side

私達はFクラスとDクラスの試召戦争による自習時間の間に課題が届くの待ちながら、談笑を続けている。

話題は取り留めのないものなんだけど、

「来ヶ谷さんその発言はどうかと思いますか？」

「何を言っているのだね。明久君の女装姿を生で拝むために彼を女子寮に連れ込んで何が悪い？」

ゆいちゃんはまったく悪びれることなく堂々と言うのを注意するかなちゃん。

私も明久君の女装姿見たい、ってダメだよ。

うえええんん!!? 頭がこんがらがっちゃう。

「そう言う佳奈多君だっけって見たいとは思わないかね。そもそも佳奈多君はムツツリだからね」

「それは……ですが私がムツツリだなんて言う根拠はどこにもありません！」

口論になっちゃったよ、ど、ど、ど、どうしよう???

「失礼するね」

「おや、明久君じゃないか。今は試召戦争中じゃないのか？」

そんな時に現れたのは明久君！

明久君の登場でかなちゃんとういちゃんは口論を止めてくれました。

「まあ、特別処遇者としての仕事を、ね」

そう言う明久君の足元に彼の召喚獣がプリントを持って歩いていた。

彼の登場に周囲はヒソヒソと小さい声で喋り出したけどどうしたんだろ？

「助かったわ吉井。いつも特別処遇者としての仕事お疲れ様ね」

かなちゃんがあからさまに大きな声で喋る。

誤解を解こうとしてるんだ。優しいかなちゃん。

「ねえ、吉井くん少し良いかな？」

そんな明久君に話しかけるのは男子で2番目に成績の高い(でもかなちゃんやゆいちゃん、私に翔ちゃんよりは下なんだけどね)久保君。えっ?なんで明久君は下の名前なのかって?それを聞いちゃダメだよ。ユー?」

「何かな久保君?」

召喚獣に課題のプリントを教卓に置かせると久保君の方に振り返る。

「君は代表の話では特別処遇者だそうだけど、なんで立候補したんだい?」

「そういえば私も知らないや。なんでなんだろう?」

「1年の時に西村先生に助けられたから、かな?」

「僕の親友ってわけじゃないんだけど、坂本雄二っていう奴がいてね。ソイツが大抵のマズイことを僕に押し付けてるのを見兼ねた西村先生が助けてくれたからさ、そのお礼っていうんじゃないか?何かしたって思っただけがこれってわけ」

そんな事があつたんだ。明久君とは同じ学校受けたけど、違うクラスだったから知らなかったけど、そう言うわけになってるんだ。

「行動力があるね吉井君は、僕には出来そうにないよ」

「それでもないよ?人にとつて良い人ってその人の価値観で決まるけどさ、久保君みたいに人を尊敬できたりできる人も大切だと思うな僕は」

「ふえ?明久君?なんでそんなに悲しそうなの?」

「だから行動力云々じゃないよ。重要なのはその人の事を想つてその人のためになる事をするってことさ」

「やっぱり明久君は凄いなあ。」

「えへへ明久君♪」

私はそんな彼に笑顔で話しかける。

「小毬さんおはよ」

明久君も笑顔で返してくれる。

「うんおはよく、それに久しぶりだね、最後に話したのって何時だった

け？」

「えつと僕が実家に帰る前かな？」

そつかそんなになるのか、時間の経過って凄いな。

「たまにはおじいちゃんにも会いに来てね。おじいちゃん明久君に会うの楽しいから」

「へくそうなんだ。分かったよ、今度寄ってみる」

「そういえば私、生徒会に配属になったけど明久君も一緒なのかな？
そうだったら私は幸せだな」

「どうだね明久君、お姉さんとこれからカフェテラスで一緒にお茶でも？」

「いや、僕これから先生のところに戻って報告しなきゃいけないんだけど」

「ええい、黙れこのスケコマシ小僧。貴様は黙ってお姉さんと優雅にお茶を楽しめば良いんだ」

ゆいちゃんはとんでもないこと言いながら明久君を連れて行きま
した。

『職員室は寄ってよ!??頼むから!!?』

そんな声を最後に明久君の声は聞こえなくなりました。

小毬 s i d e e n d

明久 s i d e

来ヶ谷さんに引きづられた僕は何とか説得して職員室に報告に行くと来ヶ谷さんと新校舎にあるカフェテラスに来ていた。

このカフェテラスは京都の名所である清水の舞台にも使われている懸造りがけづくりというものを使用している。これは太い柱を貫を使って床なんかを支える方法で、安土城や仙台城にも使われていたという。

そんな場所にあるカフェテラスの一席で僕は来ヶ谷さんと向かい合って座っていた。

「風が心地よいものだ。さて私がなぜつれてきたと思う?」

「生徒会のこと、でしょ」

来ヶ谷さんの問いに答えて買って来たコーヒーを一口飲む。

「うむ、やはり君は聡いな。どのようなことでも最悪の場合から最高の場合まで何パターンも予想し、対策を立てている。実を言うとその通りだ。お姉さんも生徒会に入ることにしたよ」

彼女はそう言って僕の反対側で同じく缶コーヒーを口に含むと喉を潤すように飲む。そして口の中を空にするとこちらに真剣な目を向け、僕の言葉を肯定する。

「入る気になったということだね。歓迎するよ、来ヶ谷唯湖さん」

そう言って僕は立ち上がり彼女に手を差し出す。

「こういった礼儀は忘れないんだな君は」

そう言う来ヶ谷さんの顔は少し悲しそうだった。

「やっぱりここだったのね、来ヶ谷さん」

僕たちが立ち上がり、握手を交わしていると佳奈多さんと小毬さんもやってきた。

「何してるの? 2人とも握手して」

「喜べ小毬君。お姉さんは明久君が生徒会の人間だと知ったよ」

「本当に!? わ〜!」

最初から知ってるんだけど、まあ良いか。こんなに嬉しそうにして
いる小毬さんの顔も見れたし、けど何が嬉しいんだろう?

僕はそのこと首をかしげるしかできないでいた。

そしてそんなお茶会はFクラスがDクラスを降すまで続いた。

明久side end

時を遡って開戦前の旧校舎屋上

雄二side

俺たちは今、対Dクラスの作戦を秀吉、康太、姫路、三枝、島田に俺の6名が居る。もちろんこの中に明久は居ない。

「ねえ、坂本吉井は？」

屋上にブルーシートを敷いて姫路達はそこに座って各々の弁当を広げている側で俺はフェンスにもたれかかる形で座り込む。

そんな俺に事情を知らない島田が明久のことを聞いてくる。

「明久君は多分、先生の手伝いをした後、別の場所で食べると思いますがよ？元々、戦争に反対的ですからね」

「何ですよ？」

「本人が言うには、この学校に入ったのは親に頼まれたからでこのシステムや試召戦争にも興味はないらしいのですヨ」

三枝の説明に納得がいかない島田が追求すると三枝は色々と話した。

明久がここのメインスポンサーである吉井家の長男で歳の的に丁度良いアイツがモニタリングのために入学したのだという。

「居ない奴のことをとやかく言っても仕方ない。始めるぞ」

俺の言葉に全員がこちらを向く。

「まず、俺たちの作戦は姫路が回復試験を受け終えて万全になるまでの時間稼ぎだ。前衛部隊を秀吉が、中衛部隊を島田が指揮、三枝はある程度点数を取ったら俺の護衛に回れ。姫路の準備が整い次第、その際生き残っている奴らで敵を足止め、俺と近衛隊が護衛しながらDクラス代表のところまで突撃、姫路が代表を討ち取れ」

俺の作戦は一種の賭けみたいなものだ。壁役である奴らがどれだけ頑張るかというのと姫路がどれだけ早く試験を終えられるかにかかっている。

「いいかこれ前哨戦だ！勝利を飾って派手にいくぞ」

俺はそう宣言した。

雄二side end

それからお昼が過ぎると両クラスから数名の生徒が出て来て鉢合
わせした。その中には先ほど指揮官を任された秀吉の姿も確認する
ことができる。

「行くのじゃ!!」

その掛け声とともにどちらにも共に召喚獣を召喚する。

立会人は日本史教師の守谷だ。

Fクラス 近藤吉宗 34点

Fクラス 田中明 56点

Fクラス 柴崎功 23点

V. S.

Dクラス 小野寺優子 98点

Dクラス 丸尾良哉 101点

Dクラス 香川希 99点

……絶望的である。その他の場所でも戦闘するが圧倒的にFクラ
スの不利は確定的だった。

「Fクラス木下秀吉参るのじゃ!」

Fクラス 木下秀吉 100点

「重点的にやっただけはあったの」

そうやって何人かの生徒と共にDクラスの生徒を討ち取っていく。

「クソツ!!?おい誰か伝令になって増援を呼んでくれ!」

「分かった、待ってる!」

その状況を見たDクラス側の指揮官が伝令を出す。

「ワシらも後退しつつ、中核隊と合流するのじゃ!」

秀吉の鮮やかな指揮のもと先鋒隊は後退する。

「逃げるぞ、追え!」

そこに深追いしていくDクラスの先発組の生き残りは指揮官の指
示のもと、Fクラス側の陣地の奥深くへと入り込んでいった。

「増援を連れてきたぞ！」

そうやって先程の生徒が残りの内、近衛組に配属される4名を残してやって来た。

「今じゃ！中核隊と合流したワシ等に続くのじゃ！」

その声によって周囲の空き教室や階段からFクラスの生徒が出現し、彼らを包囲した。

「そこにいるのは美波お姉様！五十嵐先生こちらです！」

「み、美春！？クツこうなったら、長谷川先生！数学でFクラス島田美波、Dクラス清水美春に試召戦争を挑みます！」

オレンジ色の髪の毛の縦長ツインドリルの女子生徒が島田に対して急接近すると島田数学を出して対抗する。

『試験召喚！！？』

Dクラス清水美春 97点

V. S.

Fクラス島田美波 189点

「美春いい加減諦めなさいよ！ウチは普通に男が好きなの！」

島田は直進して、清水の召喚獣と鏖迫り合いをした後、清水の武器を吹き飛ばして清水を戦死させる。

「戦死者は補習ー！！？」

そうやって窓からロープを使って西村がダイナミックに入って来ると、清水を抱えて立ち去った。

「お姉様ー！美春は諦めませんからね！」

そんな言葉を残して、

その後、Fクラスも多少犠牲を払いながらDクラスの増援を殲滅した。

「終わりました！」

その頃、Fクラスの教室内ではたった今姫路が採点を終えた。

「よし！テメエ等！死ぬ気で頑張っていっていいとこ見せろ！」

『オオオー!!?』

その言葉に闘志^{欲望}を滾らせた馬鹿どもがDクラス目掛けて突っ走る。

「Fクラスめ、いったい何を、あれ？姫路さん？Aクラスはココを通っててないけど？」

そんな間拔けな声を発した後、平賀は瞬殺された。

第8話

明久 side

戦争の終了後、僕は一応クラスメイトとして戦後対談の場には出席しておいた。

そこでは平賀君が項垂れて床にへたり込んでいた。

「まさか、そつちに姫路さんがいるなんてな。完全に予想外だよ」

その顔は本当に驚いていて、そして悔しそうでもあった。

自分の犯したミスとはいえそれによって下位クラスの、それも最底辺と馬鹿にしていたFクラスに敗北した。さらに言い方も酷いが彼女がここに在籍しているとは予想も出来やしなないし、余地もなかった。普段から成績が良く、上位に組み込まれている彼女がまさかFクラスの生徒だと知る術はない。仮に知ることが出来てもこんな方法を使って来るとは思いもよらないだろう。

「さて戦後対談の件について何だが」

その言葉に2つのクラスの生徒の顔が2つに分かれる。

笑顔になっているのはFクラス、俯き、歯を食いしばっているのはDクラス

「ああ、設備のことなんだが交換は明日まで引き延ばさせてくれないか?」

彼はそう言っただけで雄二に頭をさげる。

「負けたのは僕の責任だ。敗者であるこちらがこんなことを頼むは変かもしれないが頼む! 皆、この設備を殆ど使っていないんだ! 1日でもいい猶予をくれないか!」

そう言っただけで床に頭をつけて頼み込む。恥や外聞なんかも捨てて、ただクラスメイトのためだけにこんな行いが行える。こういう人物こそ、真に評価されるべきだ。

「だ、代表……」

彼の行動にDクラスの生徒はとても感銘を受けてしまい弱々しい言葉を吐き出していった。そんな姿に雄二は組んでいた腕を解くと平賀君に近づき、手を差し出す。

「えっ………っ？」

平賀君は戸惑いながらもその手を掴む。

彼が手を積んだのを確認すると彼を立たせ、握手に変える。その顔は今までとは違う優しい表情が現れていた。

「安心しろ、俺はお前達の設備を奪いはしない。こちらの出す条件を満たしてくれるならお前ら設備には手を出さないでそのままここで授業を受けてもらって構わねえよ」

その言葉は両クラスだけでなく僕自身も驚いた。彼はこの戦争に於いて彼らは通過点だと、その通過点で悦には浸らないと暗に言ったのだ。

「なっ坂本！話が違うじゃねえか!?!俺たちはあの設備からかわれると思つて頑張つたんだぞ！」

そんな彼の言葉にFクラスの生徒の1人が声を上げて抗議する。それに続く他の生徒達の肯定。

「静かにしろー！いいか？お前ら、もしDクラスの設備を得たらその後もモチベーションが上がるのか？」

そんな彼らに雄二は一喝した後理由を説明すると、騒いでいた生徒達は皆押し黙り、下を向く。

当然だ。人間は今の状況より、少し良くなればそこまで満足する。

満足すればどうなる？やる気を失い、モチベーションは下がる。

こと、不真面目な人間ならば尚更とも言える。

そうなれば彼の思い描いてる通りに事は運ばなくなる。

だから彼は彼らの欲を統制し、それを力に変える。まさしく、彼は統率者としての才覚には恵まれている。

その事は葉留佳さんから聞いた戦闘の方法からも伺える。

彼が使った戦術は九州の戦国大名・島津義久が考案したと言われる釣り野伏せの戦術に似ている。まず、秀吉の数名の部隊が相手を倒すなどして増援をこちらに釣り出す、これが釣りだ。

次に一度秀吉達が後退し増援が彼らを追いかけ、深入りする。

そして彼らの退却口の部分にある空き教室に人を配置する、これが

野伏

彼らを通った後、指揮官の合図で登場し秀吉達が取って返し、中核隊の島田さんと共に数学で一掃する。まさに戦法の勝利だ。

話を戻すと彼らもそのことを言われて何も言えず黙って従う。

「よし、お前ら帰っていいぞ。後は俺とコイツで話しくしな」

その言葉にFクラスの生徒はゾロゾロと教室へと戻る。僕は生徒会室に向かう。理由は今日行われた試召戦争に関する書類を書き上げなければならぬからだ。

生徒会室に入るとそこには先客が居て、その人物は何食わぬ顔してコーヒーを飲みながら外を眺めていた。その姿はとても絵になっていた。その人物―来ヶ谷さんはふと、こちらを見る。

「おや、明久君。来るのが遅いな君は」

僕に気づいた彼女はいつものようにどこか掴み所のない表情をして僕の事を見てくる。

「僕は今から書類を書かなきゃいけないけど来ヶ谷さんは何しとくの？」

「そうだな、お姉さんは放送室に行つて電子鍵盤でも弾いてくるとしよう」

そう言つて飲みきつた缶コーヒーを生徒会室備え付けのゴミ箱に捨てる。ちなみに分別はされている。

「あれ？明久君に姉御がいる〜！」

「本当だ〜また会つたね明久君」

嬉しそうに言う葉留佳さんと小毬さん、そして

「よ、吉井君？」

ポカンとしている木下さんだった。

「じゃあ、改めて僕がこの生徒会の会長を務める吉井明久です」

「生徒会副会長の木下優子です。皆さんよろしく」

「生徒会書記来ヶ谷唯湖だ。好物はキムチともずくだ」

「その好み本当に凄いやね……………」

呆れてついツッコミをしてしまう。

「はいはい〜！はるちゃんは生徒会会計担当ですよ！」

「ちゃんと名乗るように三枝葉留佳さん」

「は〜い」

注意すると返事はするけど、心配だ。

「生徒会庶務の、神北小毬ですっ！」

「小毬さんリラックス、リラックス」

あの後、全員が事情を説明しそれぞれ生徒会の役員であることが判明した。したのは別に良い、けど、何で男僕だけ!?!?

そう思う僕だった。

明久side end

第9話

顔合わせと書類の作成が終わった僕は書店に寄っていた。

理由は、今日発売されるプロの料理に関する雑誌が届いたという情報を掴んだからだ。殆どの生徒が買うことのない雑誌を見つけ、いざ、レジに向かおうとした時に見慣れた生徒の後ろ姿を発見した。

首の近くで揃えられたショートヘアのその姿はよく見る友達でもその人物は女子生徒ー生徒会副会長の木下優子さんだ。

「木下さん?」

「ツ!?!?!」

僕が声を掛けるとビクツと体を震わせた後、慌てて手に持っていたものを背中に隠す。

「あ、あら、よ、吉井君じゃない。き、奇遇ね」

僕に気づいた木下さんは動揺した面持ちで背中に何かの本を隠しながらこちらを向く。

「まあ、そうだね。それでどうしたの?ここってー

ーBL本のコーナーだよ。もしかして……………」

「ええそうよ!腐れ女子よ!滑稽しよ?!?優等生なのにこんなので!笑いたきゃ笑いなさいよ!あつはははっはっはっ!はっゲホツ、ゲホツ」

木下さんが僕の確認の言葉に逆ギレのように声を荒げ、そして咽せる。

「木下さん、図書室ではお静かに。それにそんなことで笑ったりしないよ」

「えっ、どうして?」

僕のその発言に口に手を当てて周りを見回した後、目を丸くする。

今は放課後で殆どの生徒は寮に戻っている、または、帰宅しているだろう。

「だって、趣味は人それぞれでしょ?確かに引かれるかもしれないけど、それも木下さんの個性だと思うな僕は」

僕の言葉に嬉しそうに微笑む。どうやら嬉しいらしい。

「だから気にする必要ないよ。僕はそっちの話には付いていけないけど、相談くらいは乗るからさ」

そう言っ僕は雑誌を買い書店を後にして寮へと帰った。

久々に帰る寮部屋はあの時のままだった。備え付けの学習机と本棚それに二段ベツトがあり、片方の机の上には家から持ち込んだ辞書が置かれている。本棚には僕の買った雑誌とルームメイトの本がある。

「おかえり、明久君」

「おかえりなさい吉井」

「ああ、うんただいま」

僕は部屋に帰ってカバンを机の横に置いて雑誌を机の上に置く。そして部屋にいる葉留佳さんと佳奈多さんにただいまと言う。

「ってなんで2人がここに!?!」

「あれ?いるのが普通に思ってるんじゃないの?」

スルーしてしまっただけど、ここに2人がいるのはおかしい。本来なら女子寮にいるはずだ。それと葉留佳さん、それは絶対に無い!

「思ってないから……それで、2人はなんで僕らの部屋にいるわけ?」

僕はジト目で2人を見る。

「やはは……実はですね、明久君の部屋に遊びに行こうと思ったらお姉ちゃんに会っちやいまして、そのまま2人でここで勉強しながら待つことにしたんですよ」

思い付きで僕の部屋に姉妹揃って入ったらしい。

「あれ?でも鍵……」

「棗先輩に言ったらマスターキー貸してくれたわ」

おいこら、あのダメ男子寮長何してるんだ。

そんな事を思いながら、彼女達と勉強して夜は更けるのだった。

余談だが、帰っってきた恭介は入室一番に明久に殴られた。そして葉

留佳さんはものの数十分で飽きたと言い出したので、説教した。

翌日、Fクラスに2人の生徒の姿があった。

1人はこの文月学園にファンクラブを持ち、新設された生徒会の会長を務め、副会長に新たにフラグを立てたことにより生徒会メンバー全員に加え、風紀委員長にも好意を寄せられているのに気付かない朴念神（朴念仁ではない）な天才・吉井明久

もう1人はかつては神童と呼ばれるほどの頭脳を誇っていたが、ある日を境に悪鬼羅刹と呼ばれるほどの喧嘩ばかりして教師を悩ました坂本雄二

彼らは卓袱台を挟んで、向かい合って座る。

「わざわざ、来てもらって悪いな明久」

「良いよ。それより君がこんな早朝に、それも誰もいないような時間に呼んだのはやはり……………僕の戦争参加してほしいというお願い、かな？」

ちがう？と僕は聞く。その言葉に雄二は黙って腕を組み、目を閉じている。そしてその目を開けた彼の目には強い意志が感じられた。

「その通りだ。俺はあの後、ずっと考えた。俺は世の中学力じゃない、確かにそう言っているながら俺は結局、学力に頼っちゃまった。俺が本当に証明しなかったのはもっと別のことだ。そのためには明久！お前の力必要なんだ！頼む……………」

僕を呼んだ理由を話した後、雄二は僕のすぐ近くまで来ると、額を畳に押し付け―土下座した。

元来、坂本雄二という人物について、知っていることは問題児、元神童、そしてプライド高い人物。

そんな彼が、土下座を、プライドを捨てて、頭を下げています。それ程までに彼は僕の力を頼っているのだ。

（応えてあげるべき、かな？）

彼が真摯な心で頼み込むならば、無碍には出来ない。それは人道に欠いている。

「……もう一つだけ、聞かせてもらえるかな？」

「なんだ？」

「もし、君はAクラスに勝てたとして設備をどうするの？それにたとえ、設備を交換しないと云ったとしても、彼らーFクラスの生徒が納得するかな？答えはノー。その辺りについても答えてもらうよ」

「設備はお前の言った通り、設備は交換しない。学園長に頼み込んで、再振り分け試験を実施してもらおう。そして彼奴らだが、他のクラス的女子とクラスメイトになれるといえば納得させられる」

「どうだ？と彼の目が語っている。彼の言葉はとてもクラスメイトに対するものとは思えないが、如何せん、彼らなら納得してしまいうなのでなんとも言えなかった。」

「なら君のお手並みを拝見させてもらうよ。元神童さん」
「！」

僕は笑顔でそう言う。そんな僕に驚いた顔をする雄二。

こんなことがあったことを誰も知らない。

第10話

その日のH・R・終了後、僕たちBクラスに向けての補充試験に専念していた。一言で言つて、楽なものなんだけど、さて何点ぐらいに変換されるかな？そんなこと考えながら次の試験問題に取り組むため前にあるプリントを取り出した。

そんな僕を観察する雄二の視線を受けながら・・・

明久はまた立ち上がるとプリントをとってまた席に戻り、試験を始めた。

随分と早いな、抜けてるところが多いのか？まあそれより俺も勉強しねえとな・・・

「お、終わった・・・」

試験終了後、俺は一度机に突っ伏した。

久々とはいえ4教科もぶつつけはさすがに堪えるぜ。なのに明久の野郎、余裕な顔してやがる。そんな明久に秀吉が話しかける。

「明久、お主平気そうじゃな？」

「まあ、このくらいどうってことないよ。むしろこれくらいで音を上げてちやダメだからね」

一体アイツはなんだってんだ？普段も常に落ち着いてていろんなことが起きても動揺しない。俺がアイツに劣ってるってのかよ、クソッ！

負けたくねえ。アイツには、アイツだけには負けたくない!!？

「それじゃあ葉留佳さん、お昼にしようか」

「そうですね。お弁当作ってきたし、2人つきり」で食べましょ」
試験が終わり、みんながグテーとしてる中僕たちはそれぞれお弁当を鞆から取り出して教室を出る。

「あれ？吉井達は一緒に食べないの？」

「うん、ごめんね島田さん。僕と葉留佳さん基本的昼休みはいないんだよ、だから昼休み何かあつたら電話してくれる？これ僕の電話番号とメールアドレス」

そんな僕たちに疑問を持った島田さんが話しかけてきた。とりあえずどういうわけなのかは濁しておいて、いないのを告げる。学園長から基本的には誰にも話すなど言われてるからね。友達に隠し事するのは気が引けるけど仕方ないよね。

生徒会室に着くと生徒会役員全員と風紀委員長の二木さん、それに寮長の天野さん・恭介さんに保健委員長の悠樹咲さんといった学園委員会連盟の人達（ほとんどが女子生徒）が一堂に会していた。そんな僕に口元に笑みを浮かべながら来ヶ谷さんが話しかけてくる。

「やあ、明久君。今日も今日とてモテモテだな」

「こんにちは来ヶ谷さん。僕はモテないよ、モテちゃいけないんだ・・・」

最後の方は誰にも、隣にいる葉留佳さんにも聞き取れないような小声を絞り出す。

そう、僕はモテるわけにはいかない。モテてそのこと特別な関係になれば、母親が黙っていない。必ず、その特別になったこの家のことや本人の経歴やら、知られたくないことを知ってしまう。そうなったら僕に釣り合わないというだけで、家の圧力で別れさせるかもしれない。母さんは僕の幸せを願っている。でも、同時に吉井家の繁栄を願っているのもまた事実だ。いずれにせよ、僕はモテるわけにはいかない。

「それでは、全員集まりましたので会議を始めたいと思います。まず

風紀委員長、報告を」

僕は一旦会議に意識を集中することにした。このままなあなあに考えるのはマズイからだ。

「はい、まず学園の食堂から『学生達の購買での争奪が激しいのでどうかしてほしい』という苦情が来ております。ついで寮母から『夜中に騒ぐ寮生をどうかしてほしい』だそうです」

「食堂については、購買スペースを新たに確保し、買える場所の増設を学園側に交渉します。それと購買でのルールを決めているのでそのルールを守らない生徒に対しての罰則も考えた方が良いでしょう。次に寮内にも規則があります。それをきっちり守るように通達し、騒いでいる生徒にはペナルティーとして反省文を書くようお願いします。こちららは風紀委員長、並びに両寮長ご面倒ですがお願いします」

「かしこまりました」

「わかりました」
対策を素早く講じ、それを通達するように佳奈多さんや恭介さん達にお願いする。本人らも真面目に了承し、素早くそれらの対策の用意をする。あとで、購買両者への通達はこっち作成することを決める。

「他の委員から何か苦情等を受けましたか？」

「で、では私から」

「はい、保健委員長さん。どうぞ」

他にないか見渡して聞くと保健委員長の悠樹さんが手を挙げたので発言を許可する。

「ここ最近、怪我をする生徒が増えています。それも大抵の生徒がFF団なる集団による暴行を受けたという理由だそうです・・・」

その言葉に委員連盟全員がざわつく。手を叩き、声をかけ鎮める。「よろしくないですね。その集団はおそらく殆どが2年Fクラスの生徒でしょう。僕自身としてはすぐさま解散を命じたのですが、彼らは恐らく穏便にしようが強引にしようが関係なくその行動を行う気がします。ですので、その対策として見つけたらすぐさまに我々に報告してください。こちらで対処します」

僕は彼らの行動を先読みし、その上で決断を下した。彼らにはこち

らの家のスペシャリストで改心させるしかない。そのために僕たちでなんとかするといった。その発言に拍手が起きた。そしてそのまま会議は終了した。

僕たち、生徒会、それに風紀委員長の計6名が先ほどの会議室で食事を取っていた。

「それで明久君、どうやって対処するの？ 私たちだけじゃ無理だよ」

そう小毬さんの言う通りだ。その言葉には同意する。

「もちろん、小毬さん達の手は煩わせないよ。恐らく、これは父さん達が勝手になんとかするよ」

そう言いながら伊勢海老の天ぷらをかじる。出汁がしみてて美味しいや。

「確かにそうね。私と葉留佳の家や吉井の家はこのメインスポンサーでもあるわけで、ここへの入学は言うならば実地調査みたいなもの。その調査を邪魔する障害は恐らく家が黙って見てないでしょうね。何かしらするはずよ」

そんな僕の言葉に賛同する佳奈多さん、彼女は卵焼きを可愛く食べていた。

「まあ、自分の息子が大事な総理大臣と土地証券会社の社長の息子ならそれも分かるな」

来ヶ谷さんもキムチを使った料理を食べていた。どんだけキムチ好きなのさ……

そんなこんなで昼食はこれからのことを話しながら終わった。